



第 15 回交流会「鳥いっぱいの谷と海 2019」

2019年2月3日(日)

講師:別府史朗氏

参加者:★早朝谷あるきコース5名、★のんびり漁港 コース12名

京浜急行三崎口のコンビニで昼ご飯に恵方巻を仕入れ、バスで引橋へ、それから歩いて水道広場へ向かった。いつもは水道広場への下り道と水道広場で3、4種類の野鳥は見る事ができるのだが、ヒヨドリの鳴き声のみ。ちょっと幸先が心配になる。

早朝組は水道広場 8:00 集合で、全員がそろったところで出発。早速右の草むらにアオジ、なかなか種類が増えないが、メジロ、コゲラの鳴き声、ヤマガラ、ウグイスの地なき、カラス、シジュウガラなど少しずつ増えてくる。まん中湿地では、歩く先から次々にアオジが飛び立ち、ほとんどは草むらの中に消えていくが、その中で見えるところにとまった個体を双眼鏡や望遠鏡でゆっくり観察。対岸の藪にとまった鳥を望遠鏡でとらえると、会える機会が少ない鳥カシラダカで、皆で確認。

やなぎテラスで休憩。近くにモズ。モズが 2 個体いたようだが十分に確認はできていないので同一個体だったかもしれない。えのきテラスへの道でノスリ、そしてミサゴの飛翔を、イギリス海岸ではコガモを 1 羽確認。本隊との集合場所、漁港への移動途中に南の谷と浦の川の合流点にホオジロを観認。

10:45 後発組と合流。漁港でオオバン、イソシギ、対岸の木の枝にとまるトビとアオサギ、湾の入り口に飛ぶ群れが見られたが遠すぎて種は不明。集合写真を撮って漁港を出発。眺望テラスでホオジロを観察。えのきテラスでゆっくり昼食、そしてシメ、モズを、イギリス海岸ではコガモを観察。

周りの自然を観察しながらやなぎテラスへ、草むらから草むらへ飛び交うアオジやメジロ、ヒヨドリの観察、ウグイスやコジュケイの鳴き声を聞きながら水道広場へ。水道広場で鳥合わせをして解散。水鳥、ツグミ類との出会いがほとんどなかったが、アオジ、モズ、シメをはじめ多くの鳥に出会うことができ、天候にも恵まれ良い探鳥会となりました。

(文・写真 別府史朗)



シメ



モズ

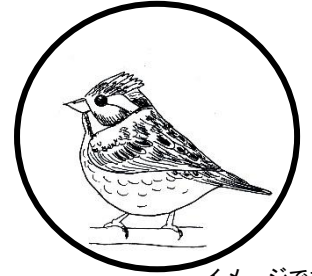
明日は立春、もうすでに春がやってきちゃったような、穏やかで明るい朝。でも、地面はうっすらと霜が降りているような場所もありました。さて、今年はどんな鳥に出会えるかとわくわく。

講師の別府さんは大きなプロミナ（望遠鏡）を担いでくださいました。



肉眼で見ると ?
双眼鏡で見ると !
プロミナで見ると ♥

24倍のプロミナの威力にうっとりしました。



イメージです



あれは何の巣？
ひょっとして
タイワンリ巣？
森中で姿も鳴き声も
するようになりまし
たね。



やなぎテラスでモズを観察。こんなにじっくり見たのは初めてです。オスかメスか図鑑を広げて確認。メスは眉が茶色でお腹に模様があるのだとか。これは眉くっきりだからオス？ 喧々諤々。



工事中の宮前の谷を抜け、漁港へ。のんびりチームと無事合流。

船を上げるスロープの波打ち際でしきりに藻をついばんでいるオオバン2羽。少し離れてもう1羽。
すかさず、Mさんがひとこと、
「朝なのにオオバンとはこれいかに」

ソフトクリームに惹かれてperl cafeに寄った人たちは頭上にタカの飛翔を確認。



こんな感じだった
ような・・・

そして、えのきテラスで楽しい昼食後



「あの子はだあれ？」
みんなが振り向くと、嘴の特徴的なシメでした。

またもやひとこと、
「締めはシメ」

せっかく来たのだからと潮の上げ始めた干潟のイギリス海岸まで下りて観察後、ゆっくりゆっくり谷を上りました。

気の早いタンポポやタチツボスミレ、ヒメウス、大きく膨らんだニワトコの芽に思わず笑みがこぼれます。



今年も素敵な一日をありがとうございました。
(文・写真 浪本)

探鳥記録 2019年2月3日(日)

アオサギ	ガビチョウ (鳴き声)	ツグミ	ホオジロ
アオジ	コガモ	トビ	ミサゴ
イソシギ	コゲラ	ノスリ	メジロ
ウグイス (鳴き声)	コジュケイ (鳴き声)	ハイタカ (?)	モズ
オオバン	シジュウカラ	ハシブトガラス	ヤマガラ
カシラダカ	シメ	ヒヨドリ	

計23種 (種を確定できないものを除く、鳴き声での確認も含む)



鴨

山雀

鶯

四十雀

頬白

鳶

鴉

鴿

磯鳴

鶇

青鶇

頭高

鶇

大鶇

小鶇

小啄木鳥

鶇

講師の別府史朗さん プロフィール

スタッフとして小網代の森に関わるほか、横須賀市の光の丘水辺公園で友の会会長として大活躍されています。日本野鳥の会神奈川支部。

●●●● ご参加の皆さまからメッセージをいただきました ●●●●



講師の別府さんからひとこと

水鳥の種類が少なかったが、思いの外多くの鳥を見ることが出来ました。

港のショップで熱い甘酒を呑む。
天空高くワシタカの仲間、図鑑を見るとケアシのノスリ、
尾羽が広く白いのが特徴。 S.S



バスおりて 小網代漁港へ ツルウメモドキ
ブツブツと葛に産卵 虫仲間
オオバンに潜る姿に 笑い声
鳥見まえ アイスに 惹かれ 一休み
スマイル藻は 橙ゆれて 初見かな
シメ 飛んで 先を指さす 交流会
トビが 舞い 見上げるうろこ 倍増し
くちばしの 細長雲は 翼揚げ
彩雲を 見てみて 騒ぐ 我一人
モズが飛び 藪越えの先 干潟あり
名付け親 浦賀のカラス 思い出し
米の歳 優しさ重ね 森歩く
新疑問 見つけて 楽し 森歩き

M.M



声とすがたを探して、レンズを合わせて、
皆で喜びの声をあげる!!
みんなと会えると、楽しい事いっぱい Y.M

大きな望遠鏡で見て鳥の観察会の感動を理解できました
ヤミツキですね。 N.Y



天気がよくて気持ちよかったです。
めずらしい鳥が(オオバン、シメ)見れて良かったです。
M.I



双眼鏡に少し慣れて、鳥を探す眼になってきたかな……と嬉しい。
ノスリ、ミサゴが見られたのもラッキー。モズの♂♀のちがいをしっかり教わった。収穫の多い
鳥見会だった。 A.S

ヤマガラ、モズ、アオジ、ノスリ、ミサゴ、シメ、?タカ、アオサギ、オオバン、トンビ、メジロ、コゲラ。
お弁当は忘れたけど、トリにはたくさん会えました。 A.K



「いたいた!」と双眼鏡でのぞいた姿をしっかりと目に焼きつけた……つもりが、
次の瞬間にくずれ去る……。また来年 H.N

スタッフ研修 神武寺

2018年12月5日(木) 参加者4名

10時、JR東逗子駅集合で 奈良時代創建の神武寺に出かけた。目的は二つ。

今日は一年に一度の薬師堂のお煤払いの日で、ご本尊の薬師如来のご開帳があり、参拝できる。本来のご開帳は33年に一度というから年一回の煤払いの読経の中で拝観できるのはよいチャンスなのだ。この日は四天王、十二神将の立像と一緒に寛文6年(1666年)の薬師堂内にも足を運べるのだ。



もう一つの目的は 小網代の森で見つけた粘菌の仲間が育ちそうな枯れた木が沢山参道脇に積まれていて粘菌が育っているかも知れない、また、裏参道は湿り気がありそこで、生命の星地球博物館の粘菌研究会のメンバーが粘菌を探して歩いているのであったことがあり、裏参道でも粘菌が見つけれられるかも知れないからだ。

今回の参加者は地元の Kさんとスタッフの Nさん、会員の Mさんと宮本の4名。

表参道は東逗子駅線路を渡り池子方面へ100mほどで大きい石柱の神武寺ですぐに分かる。いかにも昔からの古道はかくやと思わせる随所にそんな雰囲気濃い道だ。と言っても刈り取られていない野の草々が12月の姿を隠さず見せる。枯れて紫のいろも見せるトウバナやへビイチゴ、針の刺さったような実をつけたアメリカセンダングサなどなど。一年中緑のバラそっくりの葉がめだつくサイチゴ。

大きく太い杉の木が大きく影を落とす。両脇に玉切りした杉が重ねておいてある。他の木もいかにも粘菌の子実体がでそうな様子の枯れ木状態。一所懸命、枯れた木を見つけては子実体を探すのだが季節がいけないのか見つからない。風にそよぐ紫色のサヤ状の2つがススキの茎に絡まっている。中に青い豆が二粒見える。サヤの外側は濃い紫、内側は薄い紫、中の豆は青。綺麗だ。



古い石畳が終わると山門がある。切り通しを抜けると大きな青銅の宝珠を頂いた大きなお堂があった。庭に池があり何本もの大きな紅葉が斜面を覆っている。今年は台風があり紅葉の色も少しあせている。以前、一緒に来た方がここは極楽浄土のような景色だと言っていたのを思い出す。ここへ抜ける切り通しの崖もイワタバコが生えているので有名だ。他にもいろいろなシダ植物が岩から生えている。このシダ植物は種類も多くそれだけでも観察会ができそうだ。



薬師堂の前には檀家の方々が参拝記念のお札を渡してくれる。薬師如来の前で無病息災を祈る。日光・月光菩薩を従え、四天王に守られ、十二神将も両側に小さいながら力強くカラフルな姿を見せている。

帰路は裏参道の小さい水の流れが大きく谷を削る姿を見ながら枯れた木に粘菌が生息していないか見ながら下る。残念ながら誰も粘菌を見つけることが出来なかった。

沼間住まいの Kさんは自然好きのお孫さんへのお土産と言いながらテイカカズラの銀色に輝く髭を見つけてビニル袋に入れている。これが今日のお土産だ。フウトウカズラの虫えいの中の幼虫や成虫を

見つけ、Nさんが写真を撮った。同じ物を小網代漁港の近くで見つけ、何者かが課題だったのだ。写真と名前がNさんからスタッフメールにあげられた。これは私たちのお土産。

逗子中学校の側を通り、県道金沢・逗子線に出て、池子2丁目を通って、東逗子駅へ戻って今日は終了。

もう少し経って粘菌が活発になる頃、同じルートを歩きたいと話合って解散した。

記 宮本美織 写真 浪本晴美



フウトウカズラダアザミウマとフウトウカズラハチヂミフシ

■ スタッフ研修 自然教育園「やさしい生態学講座」

地衣類の勉強を始めてから、どこに行っても地衣が目につくようになりました。昨年、目黒駅に近い国立科学博物館附属 自然教育園に行きましたら、200年は経つだろうという巨木がいっぱいあるのに、なぜか地衣類が少なかったのです。なぜなんだろう？ と思っていたら、ちょうど自然教育園での面白そうな講座を見つけ、スタッフ二人でそれぞれ可能な日程を受講することにしました。ここ3年間、自然教育園の生物相調査を実施し、その成果を6回に分けて、実際に調査をした研究者の方がお話ししてくださるという講座です。気がつくのと、ついつい小網代の森と比較して聴いていました。

自然教育園の60年におけるコケ植物の移り変わり（樋口正信先生）2月10日

いきなり「コケは月光仮面だ」とおっしゃる樋口先生。月光仮面を知っているというのと、だいたい年代がばれてしまいましたが、「♪どこの誰かは知らないけれど、誰もがみんな知っている～」存在であることは確かですね。コケはみなさんご存じのように、配偶体と孢子体という2つの生活サイクルがあります。普段見ている葉っぱみたいなのは配偶体で雄雌があり、それぞれ配偶子（卵と精子）を作ります。受精すると雌の配偶体の上にのった形で孢子体が育ち、やがて蒴から孢子を撒き散らすというわけです。孢子体の時だけが遺伝的に言うところの2n（染色体を2組持つ）で一丁前なのですが、実は配偶体にずっと寄生しているというのが面白いなあと感じました。

自然教育園では、1954年、1979年、2001年に調査し、今回が2018年。大きく種数は変わらない（60種前後）そうですが、いなくなったものもあり、新しく現れたものもあり、「♪疾風のように現れて、疾風のように去っていく～」と。環境要因ももちろんありますが、調査者によっても随分変わってくるそうです。1954年はリストはあっても資料（標本）がないことを、惜しんでいらっしゃいました。

※参考資料：『コケのふしぎ』ソフトバンククリエイティブ サイエンス・アイ新書

小網代の葉状地衣

大気環境の変遷と都市部の地衣類（大村嘉人先生）2月11日

多くの方が「見えていたのに気づいていなかった！」地衣類、でも実は全陸上の6%を地衣類が覆っていて、世界で20,000種、日本は8,000種。菌類からなる体の中に藻類が共生しているのが地衣類で、その形状から葉状、樹上、固着（痂状）地衣に分けられます。化学成分は700種以上で、そのうち650は地衣特有で、染料や香料にも利用されています。繁殖は2通りあって、菌が孢子を作ってばらまき、うまくパートナーの藻類と出会うことを期待する（？）方法と、菌類と藻類がセットになった粉芽や裂芽をばらまく栄養繁殖の方法があります。

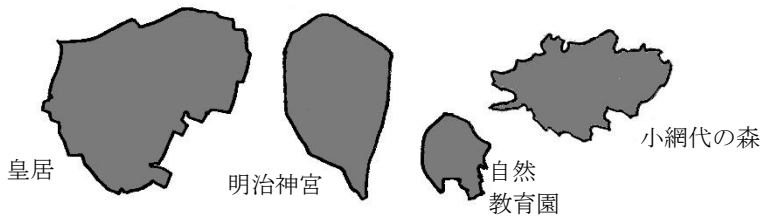


という前段はさておき、なぜ地衣類が多かったり、少なかったりするのかわかりません。結論から言うと、大気環境に影響されます。自然教育園では1996年には21種（固着20種、葉状1種）→2018年には37種（固着25種、葉状12種）に、皇居の調査でも1995-96年25属57種→2009-13年56属98種と増えています。この間に何があったのでしょうか。そう、2003年にディーゼル車規制が始まったのでした。石原元都知事も良いこととしていたんですね。大村先生曰く「地衣類は空から振りかける大気環境検査薬」、だとすると、元気のいい葉状地衣のいっぱいある小網代は都内に比べると空気が綺麗ということですね。種数も調べてみたいものです。※参考資料：『街なかの地衣類ハンドブック』文一総合出版

都心で生きる爬虫類・両生類：自然教育園生物相調査から（吉川夏彦先生）2月14日

自然教育園は広さ 20ha で、池も小川も湿地もあります。いもり池と名付けられた池もあり、当然たくさんのカエルやヘビが棲んでいるだろうというイメージでいました。ところが、両生類はたった 2 種（アズマヒキガエル、ウシガエル）、爬虫類も 8 種（ニホンカナヘビ、ニホンヤモリ、アオダイショウ、ヒバカリ、ニホンイシガメ、クサガメ、スッポン、ミシシippアカミミガメ）しかいないというのです。アマガエルもアカガエルもないんですね。その事実にとちょっとショックでした。自然教育園 20ha に対して、明治神宮 67ha、皇居 115ha で、広さがあるほど種数が増えるそうです。しかし、都心のように生息地が島のように分断されてしまうと、移動中に交通事故に遭ったりブロック塀に阻まれたり。そして個体群間の移動が困難になると近親交配が進み、生存能力が低下します。分断された個体群が絶滅すると、ますます移動も雌雄の出会いも難しくなり、あっという間に最後の 1 匹になるのです。アマガエルもこの「絶滅の渦」に巻き込まれてしまったのでしょうか。ヒキガエルもこの 3 年の調査で 3 匹しか確認できていないのだそうです。小網代で聴くカエルの声がますます愛おしくなりました。

（以上 浪本 記）



小網代の
ヒガシニホン
トカゲ
2018.9.23

自然教育園で見られるハチとその生態（井手竜也先生）2月15日

昆虫ハチ類、ゴール形成昆虫類の講義は 2 時間の半分は昆虫類、動物界、節足動物門、昆虫綱、ハチ目、世界で 13 万種、日本で 4,500 種もあるというハチについての基本情報（形態、生態、真社会性、性決定システム、さまざまな寄生様式について語られた。後半はゴール形成についての講義。常々、へんな葉っぱに注目している筆者なので、聞きのがすまいとする。

海外のハチのゴール形成の過程を撮ったビデオも初めて見せて貰った。ゴールは産み付けられた幼虫の唾液に含まれる植物ホルモンみたいな化学物質が植物に作用して作られる。小網代ではよくフウトウカズラやコナラなど見られる。ゴールは産み付けられたハチ類昆虫の卵の安定した餌の確保ができ、外敵からの保護、外環境からの保護が可能になると考えられる。寄生している様々な様式の中でも寄生している卵に産み付けて寄生するハチ類がいることにビックリ！産み付ける植物とハチ類の限定的関係もよく保っていると感心する。

東京 都心緑地の甲虫インベントリー（野村周平先生）2月16日

最終講義の昆虫甲虫類の講義は野村周平氏ご自身で作成したペットボトルを使った集虫道具の作成方法や使い方を教えてくれた。野村ホイホイと名付けられていた。細かい甲虫の解説の後、3 年間で調べられた 213 種の内、107 種が新記録のもので半数が入れ替わっていること、それらがどこからきたのかが興味深いと話されていた。また、この調査中にハネカクシ科アリヅカムシ亜科の未記載種が発見され「ニセヒゲブトムネトゲアリヅカムシ」と命名されたことを嬉しそうに話されていた。自分のフィールドで自分が発見、命名の栄誉を受けたのだ。嬉しさも分かる。

3 人の研究者はみな自分の好きな分野に没頭して過ごしている方々で満足している様子が良かった。当園は目黒駅から 10 分、白銀台駅から 7 分の所にあり、隣には都立庭園美術館がある。

入場料は 620 円、65 歳以上は年齢証明提示で無料。2 月 14 日の自然教育園見ごろ情報のチラシが置いてありカラーで写真、名前、場所、解説がある。セツブンソウが白い花びらを見せており、ひょうたん池では枝にメスのカワセミが止まっていた。この個体のことか分からないが施設の中で卵から誕生までのビデオ上映があった。四季折々、都会の中の緑のオアシスを楽しめる教育園と施設だ。ショップの商品も充実していた。



横浜から日吉乗り換え東急目黒線、60 分弱で自然教育園に着ける。再訪を楽しみにしたい。

（以上 宮本 記）

第 14 回交流会「森を抜け 鳥の目、石器時代人の目になって！」

12 月 1 日（日） 参加 12 名



三浦の古代人の生活跡が発掘された船久保遺跡見学をメインイベントにした交流会のため、小網代の森はさらっと流して歩かないと、夕方の宴会に間に合わないかもと、三崎口駅に集合してバスで小網代漁港へ移動して、慌ただしくスタートしたはずなのに森に入るとやはりいつものペース時速 100 メートルになってしまふのは仕方のないことです。

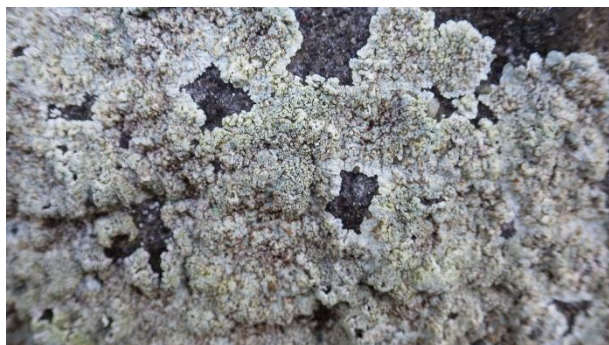
澄んだ空気と葉が落ちて見通しの良い景観が全身を刺激してあれもこれもと目に入るものは何でも脳みそにインプットするものだから処理が間に合わなくて自

然と動きがのんびりしてしまうのです。

足元ではルーペが、離れたものには双眼鏡が活躍し、それをまた仲間に伝えるのだから、ついつい足が止まってしまうのです。拡大すると対象物が何倍にも大きくなって森も深いジャングルになりいつ通り抜けられることやら。それに今年は地衣類や変形菌などの観察会をとおして、普段は目につかない微細な生き物にも注目する機会が多くあって一気に世界が広がりました。

森に後ろ髪を引かれる思いをしながら引橋バス停へ、まずは“すかなごっそ”を目指します。三浦半島を北上する車窓からは広い空に高層雲、畑には大根やキャベツと相模湾が一望のランドスケープが楽しめます。しばしのドライブで到着したのは横須賀のごちそうがたくさん販売所、いろいろな産物が所狭しと並んでいます。買いたいところをぐっと我慢して“^{くつわぜき}轡堰”へ。

広い水溜まりの真ん中の小島のまわりにはたくさんの水鳥が休んでいます。ここは鳥たちの楽園かな。人影に気付いて寄ってくるのもいます。私たちも一休みしてお弁当にします。鳥たちにもおすそ分け・・・していいものやら悩みながらもぽいっと投げると一目散に奪い合い、生存競争はいずこも厳しいものです。



オナガガモ



畑のなかの道を腹ごなしにのんびり歩いて今日の本命である*船久保遺跡を目指します。しばらく行くところもりした高みに着きました。景色が開けて到着した所は赤土が一面に広がった発掘現場。富士山からの火山灰であるローム層を何層も削りにとって現れたものは一辺が 1 メートル半くらいの四角い穴がたくさん。遺跡のイメージとしてあるのは掘立造りの丸い柱穴ですが、それとはまったく違った景觀に呆然としてしまいました。



その昔、狩猟採集生活をしていた先祖が巻き狩りをした跡だそうです。小山のてっぺんに四角い落とし穴を並べて下からみんなで山を囲んで追い上げたんでしょうね。獲物はシカやイノシシその他の小動物。あわてて逃げて穴に落ちたのを捕まえて食料や毛皮にして生活していたのかも。海の幸と山の幸に恵まれて子孫をつなぎ現在に至る。獲物たちもしたたかに生き残って今では人を追いかけて町に出没お互いに長い歴史を作ってきた仲間です。なんとか平和に共存したいものです。



だんだんと日が西に傾いてきましたが今日はまだまだ続きます。今晚は恒例の“縁の会”を三浦海岸の波打ち際でやるのです。疲れた足にムチ打たなくても楽しい夕べを目指し足取り軽く下の里バス停へ、バス待ちで西を見るとうっすらと富士山のシルエットが屏風絵のように浮かんでいました。



クコの花



クコの実



冬越しのテントウムシ

* ご注意 この記事は 12 月 1 日のものです。船久保遺跡では既に高速道路の工事が始まっており、立入ることはできません。



イベント続きの一日の締めのお楽しみ会は三浦海岸の浜を前にしての忘年縁会（誤字ではありません）です。毎年暮に縁の会と称してだれでも参加 OK での開催です。一年いろいろなことがあったでしょうがみんなで会食飲食しながらの懇談は小網代の森が取り持つ縁で結ばれた仲間が楽しかった活動を肴にして和合する場です。気を許して語り合いこれからの夢をふくらませ、大きくなった気持ちで過ごす晩に何があったかは参加者の秘密です。今回参加できなかった方も来年は是非現場をのぞきに來てください。

記：高橋伸和 写真：浪本晴美



ノシラン(野紫蘭)



花は白 細かく露を散らしたような
その実は瑠璃 しめやかな光を宿したような

随想 小網代てんてん

(34)

鏡像と争う——コゲラ

須田漢一

野鳥観察会で野比の光の丘から、長沢川(三浦市)右岸の道を歩いていると

「あ、鳥！」

道より一段上に建つ家の、柿の木に、コゲラがいた。背中に、褐色と白の横縞があり、幹へ垂直に止まっていた。

ふいに、幹から離れる。

逃げた、と思ったら、庭に停めてある車のフロントガラスを、突つき、戻る。しばらくして、また突つき、戻る。突つき、戻る。ガラスに映る、自らの像を攻撃しているのだ。

「巢に卵があるか、それとも雌がいるのでしょうか」講師に尋ねる。

「ガラスに映った虚像を同類の雄と思って、テリトリ(縄張り)を主張している行動で、必ずしも巢がある訳ではない」と言われた。

その間、3分ほど。もつと見ていたかったが、パーティが動き出したのであきらめた。

コゲラは三浦半島の森林に生息するキツキで、今から40年前には、住宅地では見られなかったのに、1970年代後半から、あちこちで確認され、現在は小網代付近まで来ている、という。

その要因は①森林が放置されたこと ②森林面積の大幅な減少(宅地化で) ③結果、森での生息が狭められ、市街地への進出が顕著になったといわれる。

森を追われたコゲラにとって、せつかく手に入れた縄張りである。まわりを車が走っているようだが、人が騒いでいても、そんなことは臆さない。そこに侵入してくる(と思っている)敵に対して果敢な防衛を続けるのだ。

コゲラのこうした行動を「馬鹿なことをやっている」「無駄なエネルギーを使っている」「脳が小さいからだ」などと批判したり、笑ったりしてはいけない。実体はないのに、それが向かってくる想像上の像に、私たちも、日々おびえていないだろうか。やれ対策だ、やれ資金を投入しろ、と右往左往して、自らが心の中にえがいた虚像

の前で、精神や肉体の徒勞の旅を続けていないだろうか。

コゲラはキツキ類の中では、一番小さい鳥で、アカゲラ、アオゲラ、ノグチゲラ、クマガラなどに比べると、一目瞭然、その小ささが分かる。小さいのだから、どこかの藪の中に隠れて、ひっそりと暮らしているかというところ、どうして、錆ついた鉄の扉を開けるような、ギィー、ギィーと鳴き声をあげ、おのれの存在を誇示する。加えて、行動の激しさは見ての通りだ。ガラスに映った鏡像(それが自分の像であつても)に、疲れを覚えず向かっていく。縄張り意識の旺盛な鳥なのだ。

多種・多様な生き物が暮らす世界では、身体の大きさと、形とか、色彩ではなく、変化する環境にどう対応できるか、が問われる。自らが秘めている力を最大限に発揮できるものだけが、生き残っていくのだろう。

よいドラマを見た、と思う。これだけは映像では味わえない世界と思った。

サロン小網代 三浦のチャッキラコ

2019.1.20 祖父川精治



平成 27 年 3 月 15 日、国の有形文化財に指定されている神奈川県県庁舎の大会議場。「かながわの唄と踊りで春迎え」と題して賑やかに芸能祭が開催された。なかでも神奈川県を代表する民俗芸能、小学生の子供たち 10 名で編成された三浦市のチャッキラコが公演される。初々しい演舞が終わり、踊り子たちの中で、小学 6 年生 2 人がこれで舞納めとして挨拶に立った。一同立ち並ぶ中で、力強い別れの言葉に満場の拍手を浴びていた。

平成 21 (2009) 年、ユネスコの無形文化遺産に指定、記載登録された。以前は、歌舞伎や能、文楽と並ぶ国指定の重要無形民俗文化財に指定されてきたものである。ユネスコ指定後最初の公演である、平成 22 年 1 月 15 日海

南神社境内は、県知事や市長を始め約 1000 人を越える観客で埋め尽くされ記録的な人出となった。

毎年、真冬の 1 月 15 日の小正月に三浦市内各地域で演じられている。寒さの厳しい時期なので、主催者側の踊り子に対する健康管理にはご苦労様と強く感じた。三浦市三崎の仲崎、花暮地区に伝わる少女のみで舞踊り、音頭取りは祖母や母親たちが行っている。当日は、元宮様で海南神社神職のお祓いを受け、境内と神前と 2 回舞踊り海南神社でお披露目となる。後、引き続き市内の港近い、竜神様で舞踊る。昔は、料亭や旅館の広間へ招かれて舞踊り、ご祝儀を戴いてきたという。

最近では、商店街にある旧商家を改造したチャッキラコ三崎昭和館前でも舞踊っている。

三崎郷土史考によると、海南神社の祭神が三崎の娘に教え伝えたもの。また、源頼朝が歌舞島で、歌舞、管弦の宴を開いた時に、浜の乙女や磯取りの女に舞を所望したという。「私は踊れないので代わりに娘に踊らせましょう」としたのが始まりと伝わる。

宝暦 6 (1756) 年、三崎志に「15 日女兒集まり踊る」という記録がある。昔は、水干烏帽子に緋の袴の衣装で舞踊ったという。

踊り子たちは、曲目によって舞扇を 1 本または 2 本を持って踊るが、1 曲だけはチャッキラコと呼ぶ鳴り物を使う。20 センチ位の細竹の両端へ五色の紙を細く短尺状に切り、鈴を取り付ける。振るとチャラチャラと可愛らしい鳴り物となる。このことから、踊りの名をチャッキラコと親しく呼んでいる。所要約 20 分。



- | | |
|-----------|-----------------------|
| 1. 初いせ | 「扇を右手に持つ」 |
| 2. チャッキラコ | 「チャラチャラ と鳴る綾竹を両手に持つ」 |
| 3. 二本踊り | 「扇を両手に持つ」 |
| 4. よささ踊り | 「扇を右手に持つ」 |
| 5. 鎌倉節 | 「扇を右手に持つ」 |
| 6. お伊勢参り | 「扇をつぼめ両手に持ち長円を描き回り歩く」 |



眠れる石のような

中井 由実

ここに命があるとは信じられない
ただ硬く、ずっしりと冷たい手触りで
石の彫刻のようにじっと立っている裸の木
手のひらを当てても
何も伝わってこない

それでも

やがて来る春の暖かい光を待っているはずだ
目覚めれば枝々が息を吹き返し
緑色にかがやき始める
王子様のくちづけを待つ
眠れる森の美女のように

魔法の眼鏡

中井由実

その斜面の一番大きい茂みから三番目の木
斜めに飛び出た枝の真ん中へん、

小さな双眼鏡だから

言われただけでは どの枝なんだか分からない
じかに見ると

多分、あれ
と思うのに

覗いてごらん、と指された

三脚の上の大きなレンズ

そこで　くりりとした黒い目の

まあるい顔の鳥が目飛び込んできた
シメ

木目込み人形に造りこまれたような
ふつくらとしたくちばしの美しいこと

魔法の眼鏡が

その先にあるときめきの命を
忘れられなく 映してくれた

音の主

中井由実

ト、
ト、
ト、
ト、
ト、
ト、

小さな小さな間断のない音が林に響く

木々が茂る場では色々な音が生まれるから

大きな音から耳に入るから

一人で歩いていたら

きつと私は気づかなかった

婆は見えなくても、

コゲラだ

と教えてくれる仲間がいなければ

こあじろの森くらぶ NEWS

スタッフの活動

- 2018.11.25(日) こあじろの森くらぶ通信 No.14 印刷・発送
スタッフ会議(横須賀市立 市民活動サポートセンター)
- 2018.12.01(土) 第 14 回交流会「石器時代の三浦半島を想像して小網代の森まで歩こう」
縁の会
- 2018.12.13(木) スタッフ研修 鷹取山、神武寺(すす払い、ご開帳)
- 2018.12.22(土) 第 15 回交流会お知らせハガキ発送
- 2019.02.03(日) 第 15 回交流会「鳥いっぱい谷と海 2019」
- 2019.03.05(火) スタッフ研修 神武寺「変形菌、地衣類、コケ類」
- 2019.03.10(日) スタッフ会議(横須賀市立 市民活動サポートセンター)

●●● 4 月 5 月 イベントのお知らせ ●●●

第 16 回交流会 「みつけよう、春の森いろいろ」

引橋入口から北尾根へ、引返してスポーツ公園に向かいます。春爛漫の小網代の森を往復するコース。昼食はスポーツ公園へ移動してからゆっくりいただきます。14 時頃から、加藤さんの写真とトークの会も開催されます。

開 催 日 : 2019 年 4 月 29 日 (月・祝日)

* 荒天の場合は中止します

お待ち合わせ : 10:00 三崎口駅前 16 時頃散会 (森歩きのみの方は 13 時頃)

持 ち 物 : お弁当、飲み物

対 象 : 「こあじろの森くらぶ」会員とご家族、ご友人

* 保険はありませんので、ご参加は自己責任でお願いします。

加藤利彦さんの写真とトークを楽しむ会「三浦半島の自然」☆ 2018 年好評企画第 2 弾

第 16 回交流会の終了後スポーツ公園会議室へ移動して、加藤さんが見つめ続ける三浦半島の風景と生きものの写真を拝見しながら撮影秘話などをお聞きたいと思います。写真とトークの会のみのご参加も可能です、どうぞお楽しみに。(14 時頃から 1 時間半程度)

開 催 日 : 2019 年 4 月 29 日 (月・祝日)

第 16 回交流会終了後、スポーツ公園会議室にて

対 象 : 「こあじろの森くらぶ」会員とご家族、ご友人

光の丘水辺公園遠足「春の妖精ニリンソウを訪ねて」

開 催 日 : 2019 年 4 月 14 日 (日)

* 荒天の場合は中止します

お待ち合わせ : 10:00 YRP 野比駅前 12 時頃散会

持 ち 物 : 飲み物

対 象 : 「こあじろの森くらぶ」会員とご家族、ご友人

* 保険はありませんので、ご参加は自己責任でお願いします。

多摩川干潟遠足「河口干潟の生きもの」

* 日程変更の可能性があります。変更する場合はハガキでご連絡します。

開 催 日 : 2019 年 5 月 21 日 (火) * 荒天の場合は 6 月 4 日 (火) に延期

お待ち合わせ : 10:00 京急小島新田駅 14:00 頃散会

持 ち 物 : 長靴必携、お弁当、飲み物

対 象 : 「こあじろの森くらぶ」会員とご家族、ご友人

* 保険はありませんので、ご参加は自己責任でお願いします。

こあじろの森くらぶ通信 No.15

2019 年 3 月 24 日発行

こあじろの森くらぶ Koajiro Woods Club

所在地 : 〒238-0101 三浦市南下浦町上宮田 1528-75

連絡先 : info@mori-club.com (高橋)

046-889-0067 (仲澤)

URL : <http://www.mori-club.com>